

朝、杉並清掃事務所から出発する職員を見送る江川雅志所長(右)=東京都杉並区で10月26日、後藤由耶撮影

document



ドキュメント

東京ごみストーリー

①

「戦争」経て闘うマルサ

住宅街に滑り込んできた車から、帽子を自深にかぶった作業姿の男性6人が降り立った。ごみ集積所の格子扉を開け、袋を引っ張り出していく。鼻で息ができないほどの臭気。ベビーカーを押して通り掛かった母親がぎょっとし、足早に立ち去った。袋の中身を調べる作業が20分間続いた。東京都杉並区の住宅地、午前8時半。数日前、付近の住民から「ごみ出しのルールを守らない人がいて集積所が汚い」との苦情が入

った。杉並清掃事務所「ふれあい指導班」の出番だ。彼らは、違反ごみの中から郵便物などを元に「排出者」を特定し、ルールを守るようお願いしに行く。人呼んで「ごみのマルサ」。女性検察官が奮闘する映画で有名になった国税局検察部(マルサ)にちなむが、決してコワモテではない。「消費は美德」を合言葉に高度成長した戦後日本。一方で処理能力を超える大量的のごみを生んだ。江東区

都内中のごみであふれかえられた。空も地面も黒くかすむほどハエやゴキブリが発生し、悪臭とともに近隣住民を悩ませた。都はごみを焼却処理する清掃工場の建設を各地で計画したが、杉並では住民が反対し、訴訟に発展した。怒った江東区民が「杉並のごみは持ち帰れ」とバリケードを築く騒動に——いわゆる「東京ごみ戦争」だ。40年余の時が流れた。杉並区は1人当たりのごみ排出量が23区で最少となり、

「収集と福祉の融合」も実践する。指揮を執るのは、江東区で生まれ育ち、江東区から通勤する江川雅志所長(58)。「ごみを取るだけの時代は終わったんです」と言い切った。

ごみは世相や人情を映し出す。福祉との融合とは何か。今回は、杉並区の収集車を追いかけてました。

2面につづく
(次回からは2面に掲載します)

ドキュメント

東京ごみストーリー ①

捨てたもんじゃない

ルール違反のごみ袋かどうか——。東京都杉並区の「ごみのマルサ」（杉並清掃事務所ふれあい指導班）たちは、袋を持ち上げただけでわかるという。異音がするし、すりと重いからだが、彼らはそれを「違和感」と表現する。その朝は可燃物の収集日。班長の古川勝さん（49）が持ち上げた袋を開けた。行き場を失つていたコバエの群れが飛び出してきた。「やっぱり……ひどいな」。思わず声が出た。

レモンチューハイの350ミリ缶が8本、500ミリ缶は2本。他の袋からはライター、乾電池。缶詰の空き缶には残りかすがびりつき、汁も垂れている。燃えるものは丸まつたティッシュくらい。中が見えないように内側をぐるりと新聞紙で囲つてあることから、出せない日であることは分かっているのだろう。

現在の最先端の焼却炉は、大抵のごみを燃やす能力がある。だが、それは認められないといふ。「資源のリサイクルは進まないし、ごみも減りません」。古川班長が言った。

区内の集積所は約4万カ所。中身がわからなければ、日々の収集は危険な作業となる。△袋からえたいの知れない臭いの液体が飛び出してきた△混入していたスプレー缶が爆発し、火災になりかけた△。そんな報告は珍しくない。収集作業員たちがヘルメットに長袖・長ズボン、厚手の手袋を着用する「重装備」の理由だ。

1面からつづく



周辺住民からの苦情を受け、
ごみ袋を開けて中身を調べる
杉並清掃事務所の「マルサ」
=長谷川直亮撮影

違反ごみは、引っ越しの多い春にぐんと増える。見つけたら、新しい袋に入れ直して△収集日ではありません！△と記したシールを貼り、集積所に戻す。それから分別収集への協力を「お願ひ」する手紙を、袋の中のごみから特定した排出者の家のポストに入れる。それでも違反が続ければその家を訪ね、指導する△になる。だが、訪問指導は反感を抱かれる△ともしばしばだ。

古川班長は「マルサ」に配属された5年前を思い出す。指導で訪れた男性に「何がいけねえんだ」と戻した空き缶を胸元に投げ返された。別の家では「お前らに袋を開ける権限があるのか！」とすぐまれたり、「本当にリサイクルされているの？」と聞き直されたりした。最後まで自分のごみでないと張る人もいる。

訪問指導でのチャイムを押す前に、古川班長には必ずやることがある。「この人に会いたい、会いたい」と念じるのだ。そうすれば、どんな言葉が飛んできても落ち着いていられるから。「違反ごみとの闘いはイタチごっこだけれど、会つてきちんと説明すれば、人は変わります。人間、捨てたもんじゃないんです」

胸ポケットには、ごみ袋を開けて排出者を探す権限などが記された区条例のコピーがある。でも、取り出すのはまだ。

ドキュメント

東京ごみストーリー ②

風の日も雪の日も

杉並清掃事務所（東京都杉並区）は、東京の副都心・新宿から西に延びて甲府市に至る青梅街道沿いにある。午前7時、100人の作業員たちが動き出した。まずはその日の注意事項を確認するミーティング、それからラジオ体操の音楽に合わせた準備運動。どの表情も真剣だ。最初にごみ収集車を追いかけたのは8月下旬。朝から日差しのきつい日だった。

ラジオ体操のBGMが終わると、作業員たちは腰痛防止のベルトを巻く。自動販売機でペットボトルの水を買い、外へ飛び出す。長袖・長ズボンの作業服にヘルメット。厚手の手袋もはめる。見ているだけで暑苦しい。

作業は3人で1チーム。1人が運転し、2人が降車して集積所からごみ袋を持ち上げ、車両後方の積み込み口に放り込んでいく。住宅街を縫うように走りながら、さっと降りて積み込んでは乗り込み、またさっと降りての繰り返し。作業服の背中やわきに汗じみが広がった。

車高が高いから乗降時に足のねんざが絶えないという。集積所では中腰になるから腰痛は職業病らしい。手袋を取ってみせてもらうと、フルから上がったときのように手のひらが汗でしわしわだ。逆にこれから寒い季節には、あかぎれのように指先はボロボロになる。

車1台がようやく通れる細い道。後部座席に小さな子どもを座らせた自転車の女性が近づい

てきた。「すみません、どうぞ」。作業の手を止め、進路を開ける。機械的に作業しているようで、実は周囲に気をつかっていた。

1台の収集車に積める量は最大2㌧。30～40分で満杯に近くなるから、いったん清掃工場へ向かう。現場と工場の間を1日6往復する。

江川雅志所長（58）も事務所でのんびりしているわけではない。安全管理の総責任者には、緊急の連絡が次々に入る。熱中症、けが、交通事故……。「ごみ袋に虫がいて刺された」とときは、皮膚科に向かわせながら時間とルートを計算して代替要員を手配した。地域ごとにおおよその収集时刻が決まっていて、区民はそのリズムで生活しているから、遅くても早くともいけない。

台風だろうが大雪だろうが、ごみの出ない日はないから「今日は行けません」もありえない。夕方。事務所に戻って来た作業員たちは、報告書の作成などを済ませた後、交代で浴室に入つて汗を流し始めた。虫に刺された作業員のけがも軽微だったと報告が入った。ふんわりと、せっけんの香りと談笑する声がそこかしこに広がる。江川所長は胸をなで下ろした。

「毎日、安全が何よりです」。日曜日と年末年始の4日間を除いて、毎日、同じ日課が続く。



ごみを収集する作業員の手は、ごつごつしていて、荒れている=後藤由耶撮影

次回は7日に掲載予定です

ドキュメント

東京ごみストーリー③

祭り翌朝 悲しい便乗

壊れた扇風機やさびついたガスコンロ、スプレーがまる見えの椅子、使い古された長机がある。向こうに見えるゆがんだ木の枠は、元は窓枠だったか。隙間を半透明の袋で埋め尽くし、ごみの山は大人の背丈ほどになっていた。

JR高円寺駅前だ。8月26日から2日間で100万人の人出があった「東京高円寺阿波おどり」。その翌朝8時、杉並清掃事務所方南支所の作業員15人が、主会場だった駅前ロータリーのわきや周辺に散っていった。

「誰がどう見ても、祭りのごみには見えないでしょう。大半が不法投棄、いわゆる便乗ごみです」。江川雅志所長(58)がため息をつく。多くの人々が踊り酔いしれて交流した。その熱狂の翌朝の風景は、あまりにも殺伐としていた。通勤する人たちは、駅前のあちこちにできたごみの山や作業員たちにわき目もふらず、高架の駅舎に吸い込まれていく。

祭りの出店から出る廃棄物は、すべて有料の「事業系ごみ」となる。ごみ袋の大きさに応じて決められたシールを貼り、ごみ置き場に出すのがルールだが、毎年捨てられる無数の袋の中でシールのあるものは数えるほどしかない。

祭りを主催する地元のNPO法人も、手をこまねいているわけではない。数年前から便乗ごみ

みをなくすためのチラシを配ったり、見回り活動にも力を入れたりしている。それでも一向に減らないから、今年初めて青色のごみ袋を準備し、地域の子どもから大人まで100人を超えるボランティアと一緒に来場者のごみを分別回收して不法投棄との見た目の区別を図った。

この日、作業員たちがごみの山を上から順に取り除いていくと、一番下に、便乗ごみに押し潰された青色のごみ袋の固まりが出てきた。祭りが終わり、人影が消えた宵闇に紛れ、次々と不法投棄されたことを物語っていた。善意が悪意に踏みつけられたような光景だった。NPO法人によると、祭りで出た約15㌧のうち7割が不法投棄だったという。

便乗ごみが祭りの後味を台無しにする。不法投棄でも片付けるのは清掃事務所や委託業者になるのだが、祭りなど大型イベントごみをめぐる問題は、全国どこも似たり寄つたりの悩ましい状況を抱えているのではないか。後片付けのマンパワーがなければ、祭りそのものが成り立たない。

「ごみを集めているボランティアや、後片付けをしている誰かがいることに想像をめぐらせてくれれば。それがせめてもの願いです」。江川所長が言つた。



祭りの翌朝。JR高円寺駅前のあちこちに「便乗ごみ」の山ができていた=成田有佳撮影

11月8日

ドキュメント

東京ごみストーリー④

ペットは家族別れに涙

「死体があったの、どうですか?」。電話で応対をする職員の声にぎょっとした。でも、東京都杉並区の杉並清掃事務所の大部屋は平穏そのもの。ネコが車にはねられ、道路で死んでいるらしい。動物専用の分厚い黒色の収容袋を手に、若手職員が車に向かう。その背中に、亀田一彰・統括技能長(56)は「氣いつけてな!」と声をかけた。

廃棄物処理法は、死んだ動物を「廃棄物」に区分している。ペットも野生動物も死んでしまえば「ごみ」となり、回収や処理は清掃事務所の仕事となる。保健所も引き取つたり捕獲したりするが、あくまで生きている動物が対象だ。動物の死体は鳥インフルエンザなどのウイルス感染や正体不明の病原菌が死因の恐れもある。作業には「細心の注意が必要」なのだ。

「でも、生きものはそうはいってもやっぱり、ごみじゃないんですわ」。収集作業員からたたき上げで統括技能長になった亀田さんを、同僚たちは親しみを込めて「トーカツ」と呼ぶ。現場のすべてを知り、ペットとの悲しい別れの場面にも何度も立ち会ってきた。

母親に連れられて清掃事務所に来た小学生の女の子は、両手にミニウサギの死骸を乗せていました。でも、どうしても渡してくれなかつた。「さようなら……」。係の職員がそう言つてもいやいやをする。目から大粒の涙がこぼれまぬいでいるわけではない。数年前から便乗ごみ

11月8日

た。翌日も来ただれど同じ。3日目によくやく心を決めたようだった。「ごめんね」。そう言つて渡され、職員も両手で受け取った。

「トーカツ」自ら、小型犬の回収を行つたこともある。若い女性だった。「その子」がいなくなれば、1人暮らしの生活になる。「最後にもう一度、お別れさせてください」。それがなかなか終わらない。愛する「家族」との別れ時間がかかるのはよくわかっている。「この仕事で、いちばん涙が近い場面ですよ」

昔は、段ボールに何匹ものネコが入れられ、ごみに出されていたこともあった。いまは、人間とペットの距離が近くなつたと感じる。回収側の対応も当然変わる。「うち（杉並区）は死んだ生きものをごみと一緒に燃やしたりはしませんよ」と亀田さん。杉並区では3100円払えば、ペット葬祭の専門業者に委託して火葬するようにしている。飼い主のいない野生動物の場合は区が費用を負担する。

その日、事務所裏の冷凍保管庫には、ネコ9匹、タヌキ1匹、カラス1羽、イヌ1匹の死体があつた。動物の死体回収は年間約700件。明らかにペットと分かれ、1週間は保管する。飼い主が「もしかしてうちの子が……」と捜しに来ることがたまにあるからだ。

2017.11.8
1つづく

杉並清掃事務所に回収され、火葬された動物たちが眠る川崎市の墓地。慰靈碑には献花が絶えない—成田有佳撮影

11月9日

document

ドキュメント

東京ごみストーリー ⑤

集積所設置やまぬ相談

清掃事務所では苦情、意見、問い合わせなど日々電話が鳴りやまないが、ごみの集積所にまつわる相談がほとんどを占める。中でも多いのが、設置場所をめぐるものだ。

「集積所は、そこに住んでいる人々が決める住民主体が基本。それに基づいてわれわれ職員が収集します」と杉並清掃事務所（東京都杉並区）の江川雅志所長（59）。ただ、今も昔も自分の家の前に他の人のごみが集まるのは気分がないものではないが、昔は今ほどにもめごとが表面化することほなかつたという。

10月末で「廃止」宣言が集積所に張り出された地区がある。細い私道のわきに所有者の好意で置かれていた集積所で、相談を受けた杉並清掃事務所の担当者が訪ねて聞くと「知らない人がごみを投げ入れる」という不満からだつた。町内会長も集積所の変更について利用者の住民に話し合いを呼び掛けたが、なかなか集まらず、引き受け手が見つからない。とうとう所有者が業を煮やしたといつてんまつだった。

新しい住人へ入れ替わる一方、地域で長く暮らしてきた人たちが高齢化している。地域の「まとめ役」がいなくなり、住民同士でもめごとを解決できなくなっている。集積所の引き受け手が決まらず、住民の手で掃除や管理がされなくなつた集積所ほど違反ごみなどで荒れている。廃止宣言のあつた集積所も結局、数戸ずつの集積所に分散することになった。杉並区では近年、集積所の設置基準を事实上緩和しており、この4年間で5000カ所も増えた。

ごみの集積所はその地域社会のありようを映す。「集積所が細分化されたら、ご近所さんと話をする機会も減るので、さびしいです」。江川所長は集積所について意見を寄せた区民の女性の言葉が忘れられない。



集積所が増えるたび、住宅地図に設置場所と収集ルートを書き直していく—長谷川直亮撮影

2017.11.9
1つづく

ドキュメント

東京ごみストーリー ⑥

戸別収集 高齢者に笑顔

今年86歳になった佐藤節子さん〔仮名〕は、待ちきれない様子でそうきんやバケツを用意していた。約束の時間まであと少し。振り返って見上げた寝室の照明のカサに、黒い斑点がたくさん付着していて、気持ち悪い。

長年連れ添った夫が病没したのは18年前。以来、夫と暮らした団地の4階の部屋で1人暮らしがしている。団地にはエレベーターがなく、手すりのない階段の上り下りはしんどいし、室内で掃除機をかけたり、電灯一つ取り換えたりするのが一人ではできなくなつた。

玄関のチャイムが鳴った。佐藤さんが腰を伸ばし、扉を開けた。薄暗い踊り場と対照的に、明るい水色の作業服を着た男性2人が帽子を取り、朗々とした声で言つた。「杉並清掃事務所のふれあい指導班です」。

ふれあい指導班、人呼んで「ごみのマルサ」。日々の任務は、違反ごみの排出者を特定し、訪問指導するだけに終わらない。江川雅志所長(59)の「ごみを取るだけの時代ではない」の言葉通り、彼らは「福祉の実動部隊」の顔も持つ。マルサ班長の古川勝さん(49)たちは、佐藤さんの依頼にもとづき、照明にたまたま虫の死骸を掃除するため訪れた。

持参した脚立に班員が乗り、ぞうきんでカサを丁寧に拭き取ると、照明は元の明るさを取り戻した。5分足らずの作業。でも、足腰がめつ

きり弱くなった佐藤さんにはありがたい。「ああ、うれしい」。佐藤さんの笑顔に、マルサたちは「僕らならではの仕事」と感じた。

集積所までごみを持って行けない高齢者や障害者世帯のため、玄関前まで収集作業員が出向いて回収する戸別収集は、東京都杉並区でも約20年前から続く。ところが近年、戸別収集の際に「家賃の移動を手伝つていただけますか」「高い所にあるものが取れなくて」といった日々の困りごと相談も受けられるようになつた。作業員たちの間から「要望があれば応じよう」と提案があり、正式に業務に追加されたのは4年前だ。

人口が日本一多い東京都は、高齢者数も全国最多。国の推計では、高齢世帯に占める1人暮らしの割合が2035年には全国平均(37.7%)をはるかに超える最多の44%になる。日々の収集を通じて触れ合う機会の多い作業員たちは、1人暮らしのお年寄りたちにはかけがえない存在となり、ますます頼りにされていく。

時代のニーズがごみ収集の現場を変える。昨年、杉並区のごみ収集部門の全車両約100台に自動体外式除細動器(AED)が搭載された。全国的にも異例の取り組みは、江川所長が高齢者福祉部門にいたときの「ある体験」がきっかけだという。なんだろう? 二つづく



「ずっと気になつていて」。自宅の照明の汚れを拭き取ってもらった女性はうれしそうだ=長谷川直亮撮影

document

ドキュメント

東京ごみストーリー⑦

異変を察知 命助けたい

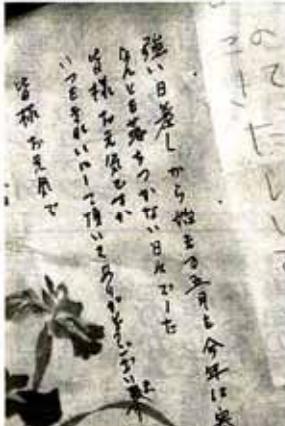
「近所のおばあちゃんちの電気がついたままで、宅配弁当も新聞もたまっている。何かあったのかもしれない」

そんな電話が東京都杉並区の高齢者福祉部門にかかるたびは2010年4月のことだった。杉並清掃事務所の江川雅志所長は、當時、この部門に異動したばかり。電話を受け、介護支援専門員のケアマネジャーらと現地に急行した。呼び鈴を押しても応答がない。警察官立ち会いのもとで鍵を壊し、室内に入ると、浴室のそばで倒れている女性を見つけた。救急車で病院に運ばれ、幸いにも一命を取り留めた。

その夏、東京で衝撃的な「事件」が続いた。都内男性の最高齢とされていた足立区の「111歳」が、自宅で白骨化していた。杉並区でも「113歳」とされていた都内の最高齢女性が所在不明になっていた。安否確認をしないまま最高齢者を更新していく行政に批判が集まる一方、死亡を届けずに年金をだまし取る問題もクローズアップされた。

急ぎよ100歳以上の安否調査が始まり、江川さんも杉並区内のお年寄りを訪ね歩いた。「私は生きる価値がない」と小さな体を更に小さくして涙した一人暮らしの女性。100歳を超えた親と80代の子の老老介護の家庭。孤立しがちな高齢者を見守る難しさを痛感した。だから、杉並清掃事務所長として清掃部門に

杉並清掃事務所に感謝の手紙が届いた。疲れも吹き飛ぶ瞬間だ』長谷川直亮撮影



戻ってきた15年、区の上層部に掛け合ったのは、清掃部門の全車両に自動体外式除細動器（AED）を搭載してもらうことだった。

清掃部門は戸別収集を通じて「異変」を察知できる。倒れた人を見つけるなど緊急事態に出くわしたとき、最低限の人命救助ができるれば、行政の見守り体制は厚みを増す。10年の体験から「ごみを取るだけではもったいない」との思いに駆られたためだった。

区のトップもAED搭載の意義を認めた。折しも国立社会保障・人口問題研究所の推計から、東京は35年に高齢者人口が400万人に迫り、高齢者世帯のうち一人暮らしの割合は全国最多の44%になると見込まれていた。

「ごみが出ていかなかったので、何かあったかと……」「かぜで寝込んでいた? 大丈夫ですか?」今年8月下旬、杉並清掃事務所の大部屋に、受話器を握る職員たちの声が響いていた。電話の相手は戸別収集先のお年寄りだったり、緊急連絡先として教えてもらっている家族だったり。熱中症が増える季節は、可燃ごみが出ない日が1日でもあれば安否確認をしている。「きょうも取り越し苦労で良かったです」と安堵する職員たち。「ごみを取るだけの時代」には想像できなかつた職場の光景だ。||つづく

次回は14日に掲載予定です